目次

◆異様な顔の世界へようこそ

■Ⅰ■壺に顔あり

◆◆ 土偶形容器
◆◆ 人面付土器

■Ⅱ■入れ墨と目の霊力

◆◆ 線刻人面土器
◆◆ 辟邪文銅鐸
◆ 黥面埴輪

■Ⅲ■邪霊を阻む顔と盾

◆ 盾持ち人埴輪

■Ⅳ■墨で描いた顔とその祭祀

◆ 人面墨書土器

■Ⅴ■付　論　異様な顔を掘り下げる

◆1　顔からみる弥生びとの精神　（設楽博己）
◆2　古墳時代の人面にみる恐れの心　（辰巳和弘）
◆3　人面墨書土器にみる恐れと祈り　（高島英之）

◆異様な顔の世界へようこそ

今から四年前のことだ。この博物館の北にある国史跡八幡塚古墳の発掘調査と整備にも関わっていた私は、現場担当のT君から人物埴輪が出たという報を受け、博物館準備室のオフィスから現地に駆けつけた。そこは、古墳の一番外郭である外堤の角隅の場所であった。なんと、完全な人物埴輪が横向きに倒れている。操業中に崩れた埴輪窯でも滅る幸運に恵まれない限り、完全形の人物埴輪が出てくることなど希だ。ドキドキしながら埴輪の顔を覗きこんでギョッとした。

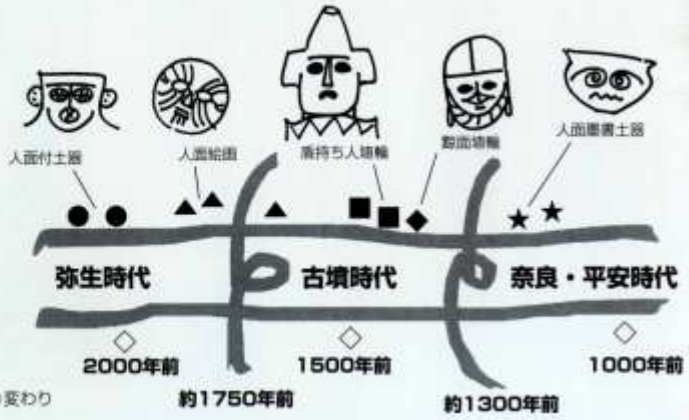
見開いた目、高い鼻、への字形に歪んだ口・・・。その顔の異様なこと。鳥肌が立つような一瞬だった。

古代の人面というと、みなさんは埴輪に代表されるような純朴な顔を思い出し、いにしえへのノスタルジーをかき立てられると思う。しかし、そんなほのぼのとした期待は、この特別展で大きく裏切られるだろう。なぜなら、古代の人面造形は、喜怒哀楽の一般的感情表現では割り切れない「異様な顔付き」がほとんどなのである。なるほど日常的な感情表現は、ことさら造形される必要もなかったに違いない。では、特別につくられた異様な顔付きとはいったいどのようなものだろうか。大きく見て次のような特色が挙げられる。

○手足などの全体的造形よりも、人面を強調する。
○人面を写実的に表したものはごく少ない。
○目に瞳の表現がみられないものが多い。
○異人のように高い鼻など、日本人に通有でない肉体的表現がある。
○刻まれた入れ墨など、顔面部分の加飾を強調する。

要するに、ふつうでない部分を取り上げて「超人間性」を強調する傾向があるように思う。そうしたパーツの集合として構成された形相は、人間的情緒を欠落した「無機的な表情」に仕上げられている。現代の私たちでさえも、明らかな怒り顔よりも冷たさの中に何らかの決意を秘めた無表情（例えば薄ら笑いなど）のほうに恐怖を感じる。江戸時代の幽霊画をみてゾッとするのも、憤怒の表情ではなく無機的な冷たさがゆえに、恐ろしさが増幅するからだ。それに共通するものが、古代の「異様な人面」にも感じられる。

こうした考古資料のなかにある超人間的人面は、何に向けられ、どのようなメッセージをもって造形されたのか・・・。集団の祖先霊の姿を造形したものだろうか。人智を越えた存在である「邪霊」など恐れの対象となるものに向けられたものだろうか。この特別展では、古墳時代とその前後の時代の「異様な人面」を集成し、恐れの心の変遷について考えてみたい。



「かお」の移り変わり

Ⅰ◆壺に顔あり

■土偶形容器
■人面付土器

一般のひとびとが原始・古代の人面表現としてすぐに思い起こすのは、縄文時代の土偶や古墳時代の人物埴輪であろう。その両者のはざま「弥生時代」の人面はあまりお馴染みでないかもしれない。しかしこの時代にも、西日本・東日本ともに特徴的な人面資料が存在している。

縄文時代晩期の流れをくんだ土偶は、弥生時代になっても作られている。有髯土偶（ゆうぜんどぐう）と呼ばれるこの土偶は、顔面にホオヒゲ（髯）あるいは入れ墨のような線を刻んで飾ったもので、東海地方から中部高地、関東、東北地方南部に分布し、弥生中期初めにはその姿を消す（筑波・設楽一九八五）。

◆土偶形容器◆

有髯土偶の影響を受け、それと入れ替わるように出現する人面資料に土偶形容器がある。これは、土偶のような足の造作を持たず、筒状で中が空洞のうつわに顔と腕を表現したものである。顔には有髯土偶に似た「線」による施りがある。容器の中には乳幼児の骨片が入っていた例があり、ほかにも墓と関連する出土状態を示すものがある。したがって、小児の埋葬儀礼との関係が濃厚だとされている。

中部日本から東北南部にかけて出土例があり、弥生前期に出現し、弥生中期初めに最も盛行する遺物である。

◆人面付土器◆

弥生中期になると人面付土器が出現する。

人面付土器
弥生中期　海後遺跡 再葬墓（茨城県那珂町）

壺にひょっこりと顔が付いており、全く手足が表現されないという不可思議なものである。顔を付ける器は、壺に限定されている。

人面付土器は、顔の表現場所により大きく二つに分類される（石川一九八七）。顔を壺の口の部分に表現する「人面付土器A」と、壺の胴の部分に表現する「人面付土器B」の二者である。前者は中部日本特有のものであり、後者は西日本に起源をもつ別な系統のもので弥生後期に出現する。

人面付土器Aは、中部日本、特に関東地方に厚く分布し、流行の時期は弥生中期前半にピークがある。人面の表現は、耳・鼻・あごのラインを粘土を盛り上げて示し、目や口の周囲に入れ墨かヒゲのような線刻・刺突をあしらって飾っている。耳を大きく強調するのも特徴のひとつだ。顔面はとても写実的とはいえない異様な形相である。ほかに、口と耳だけを強調し抽象化したものや、壺の模様のなかに人面を組み込んで表したものが存在する。また、小型・中型・大型いずれの壺にも顔を付けた例がある。

弥生の「かお」いろいろ